

# 倭の五王とその祖先について

佐藤長

【要約】 倭の五王の、当時の天皇への比定については、松下見林・那珂通世以来の説でほぼ定まったように見えるが、その比定の方法には問題があるので、ここに別な考えを以て、従来の比定を一層確実なものにしたいと思う。同時にその祖先たる応神天皇は本来の伝承は極めて僅かで、少なくとも記録の上では後に増修されて巨大な存在とされたこと、その母親神功皇后については朝鮮征討のときのある従軍巫女の実在が物語化されて一層神秘的な開祖伝説とされたことを推測してみたい。

史林 五三巻四号 一九七〇年七月

## 一

倭の五王とその祖先について (佐藤)

近代以後において歴史研究者が日本古代史を再構成するにあたり、最初にその作業の基礎として扱った問題は、紀年と皇統を如何に確定化するかということであった。周知のごとく、これについては記紀に種種のデータがあり、徳川末期以来先学諸氏によってこれらの問題は検討が続けられてきた。紀年の問題は先ず那珂氏によってその基礎が置かれ、それに基いて現在ではかなり精確な年代が設定されるようになった。一方皇統の問題は中国の史料によって記紀の記載が検討される方法がとられ、倭の五王

と称されるものが五世紀の諸天皇に比定され、かなりの程度の成功を見た。しかし従来行われてきたこれらの比定を仔細に検討してみると、未だその間には異説が多く、それぞれの比定は必ずしも安定したものではない。いつて見れば諸王の確定化は今日なお困難な状態に置かれており、それは延いて年代の決定にも影響を及ぼしているのである。今日この問題を新なる方法によって解決をはかることは頗る困難なように見える。しかし、私は年来考究の結果、今までは少しく異った考え方で五王を確定化できるのではないかと思うようになった。それをここに述べて大方の批判を請いたいと思うのである。

既に知られているごとく、『宋書』・『南齊書』・『梁書』には倭王として讚・珍または弥・済・世子興・武の五人の名を挙げ、その南朝諸王朝への貢獻を記している。

これらを武から逆に遡って検討を行なってみよう。

(一) 武については、松下氏<sup>①</sup>以来、雄略天皇の名オオハツセワカタケ(大泊瀬幼武)の武をとったものとして諸家の間での異論はない。

(二) 問題は世子興から始まる。興は『宋書』倭国伝に「興死して弟武立つ」とあるから、武の兄であり、雄略の兄安康に比定される。この考えは松下氏以来多くの人が賛成しているが、その理由を松下氏は安康の名アナホ(穴穂皇子)が「訛って」興と書かれたといい、那珂氏は興の古音が「ひょん」hing<sup>②</sup>または「ひん」hing<sup>③</sup>であり、アナホのホに近いからだという。しかしホの音が全く違った「ひょん」または「ひん」に写されるという理由は私には分らない。一方菅氏は、世子という語からして、履中の子のイチベノオシハノミコ(市辺押羽皇子)と考え、原氏はそれを允恭の子のキナンノカルノミコ(木梨彗皇子)と推定している<sup>④⑤</sup>。しかしこれも両説とも、音韻比定の上からは全く無理であろう。ところで安康の名は確に穴穂皇子であったが、問題は穂でなくて穴にあるのではなからうか。穴の字の両側の縦の劃が少しく上

って書かれたとき、それは𠄎に頗る近い字となる。中国では皇太子の名に穴のような字が用いられるとは思わなかったであろうし、誤読或は誤写によって𠄎と見たに相違ない。𠄎は勿論興の略字であるから、この本字が用いられるようになり、それが歴史的記録に残っていったのであろう。なお一九五六年に中華人民共和国から公布された「漢字簡略化案」には、興の簡化文字は𠄎となつてゐるが、これも古来の略字を新に指定したものに過ぎない。

(三) 『宋書』倭国伝には「済死して世子興が遣使貢獻した」ことをいう。世子という語を常識的に考えれば、済は興の父にあたるであろう。皇統では当然安康の父允恭に比定される。これも松下氏以来行われている説であるが、松下氏は允恭の名のオアサツマワクゴノスクネ(雄朝津間雅子宿禰)の津が済に似ているからとし、那珂氏は津も済もワタリ(渡)を意味しているから通用したのだという<sup>⑥⑦</sup>。アサツマは大和の葛上郡の地名であるが、ツがこの場合所有格を表すのか、名詞の語頭を示すのかは明かでない。しかし何れにせよ中国の朝廷でもそれは分らなかつたであろう。しかし中国の朝廷が採用するなれば、津であってもよいわけだ、何故それをわざわざ済の字に代えたのであろうか。その説明がないため両氏の説は極めて不自然なものと思われないのである。しかし恐らく済はワタリでなくてスクウ(救済)であり、

書信にはもともとこれがスクネのスクに当てられていたのではなからうか。スクネは現在記紀ともに宿禰が圧倒的に多いが、五世紀の中期には必ずしも宿禰とばかりは写されなかったであろう。当時ネに如何なる字が当てられたかは分らないが、仮に禰とする  
と「済禰」という写し方があったとも見ることができ。少くとも津が済に置換えられたとするよりは、この方が遙かに自然な考え方であると思う。

二

(四) さて済の前に存在した倭王は『宋書』では珍であるが、済と珍の血縁関係はこの書では何ら記されていない。一方『梁書』ではそれは彌であり、済の父として記されている。そして両書とも珍・彌の前代としては讀または贊を置き、これを兄としているのである。そこで讀と贊を同一人物と見れば、珍と彌はやはり同一人物と見なさざるを得ず、問題は珍と彌と何れが正しいかということになる。またこれを皇統と併せ考えると当然反正に比定されるわけであるが、反正は允恭の兄であり、親子ではないことに矛盾がある。

これを最初に反正に比定したのはやはり松下氏であるが、それは反正の名がミズハワケ(瑞箇別)であり、瑞は珍と字形が似て

おり、このため「訛って」珍となったのだという。<sup>⑧</sup> 那珂氏は珍と瑞とは珍瑞などと連なる字であるからミズの義を表わしたのだという。<sup>⑨</sup> 彌と書いている『梁書』は、前代の部分は『宋書』のそれを大体そのままとっているから、多くの学者は彌という王名の史料の価値は余り認めず、これを詳しくは考えなかった。ところが戦後前田氏はこの問題に関して頗る興味ある異説を唱えた。氏の説は基本的には二つの主張から成るが、その一つは、諸種の版本を参照すると、この王名は転写の間に彌→弥→珍と変っていったのであり、もともと『宋書』にも彌とあったのだというのである。<sup>⑩</sup> また氏は第二の主張として、倭王武が昇明二年(四七八)に宋朝に送った表文に(『宋書』倭国伝)、

自昔祖禰躬擐甲冑、跋涉山川、不遑寧処……臣亡考済、実忿寇讎雍塞天路、控弦百万、義声感激、方欲大举。

とあるのを引き、次のごとくいう。<sup>⑪</sup>

これによっても倭王武の父は済であったことが確認されるが、ここで問題となるのは祖禰という文字である。禰というのは父のおたまやのことで、廟に祭った父の意にもなる。祖禰又は禰祖は亡くなった祖と父の意である。ところが考えてみると倭の方では二三代前に彌という王があるのにわざわざそれと紛らわしい禰という文字を使って祖禰などと書いて上表す

るのは少しおかしな話である。これは祖禰ではなく、元來祖禰却(即?)も祖なる彌とあったのを、シナ人が彌という人名に慣れぬものだから、祖禰という甚だ類似した熟字と混同して、彌の弓偏を示辺(偏?)にして禰としてしまったのではないか。つまり倭王武の上表文には祖が彌であり、父が済であると書いてあったから、梁書は彌を済の父即ち武の祖父としたに相違ない。ひねくって考えると、元來上表文には禰とあったのを梁書の編者が彌との類似からよみ誤って禰を彌だと見たのだともいえるが、祖禰という熟字をよく知っている筈のシナの読書人にはそういうことはあったとは思われない。

最初の祖禰という文字についての氏の説明は一応正しいと思う。しかし「倭の方では二、三代前に彌という王があるのに云云」というのは、氏が彌という王を第一の主張において既に実在と認め、その後の文もそれを基として議論を進めていることによる。即ち氏が彌を実在と認めた根拠は、前代の彌から珍への変化という点とであり、要するに『梁書』の彌を正しいと定めたからである。しかし彌は眞実正しい名であろうか。後代の文献を以て前代の文献の記載を誤とするにはそれ相当の証拠がなければならぬ。何故かなれば後代のものこそ誤った転写を残す可能性が大きくなるからである。私はわざわざ『梁書』の記載を以て『宋書』の文

字を修正するには前田氏の論拠は薄弱であると思う。

前田氏が珍を誤とみた原因には、珍を反正に当てるのに躊躇せざるを得ないものがあつたからであろう。成程ミズハワケは記では水齒別、紀では瑞齒別で、珍とは大して関係なさそうである。しかし珍は「めずらしい」であるからミズの意を表す文字としてそのとき用いられたのではなからうか。五世紀の半頃では未だ用いる漢字は定まっておらず、ミズを写すために近いよみをもつ珍の字が宋朝への上表文に記されていたのではないかと思うのである。とすれば珍が誤であるはずはなく、『宋書』の記載は正しく、従來の比定どおり反正と考へて差支えないであろう。

前田氏が彌を設定する第一の根拠はこれで失われたわけであるから、第二の根拠とされる祖禰を祖彌とみる考えも当然その主張は力の弱いものになるが、これも実は祖禰をそのまま正しいものと見て間違ないであろう。前田氏は「ひねくって考えると、表文に彌とあつたのを『梁書』の編者が彌との類似から誤って禰と見たのだともいえるが」とし、中国の読書人が祖禰というよく知られた熟語を読み誤るはずはないとされるが、私は逆だと思ふ。これは明かに『梁書』の編者の疎漏で、祖禰を祖彌と読み誤って、彌なる倭王を作り出したのである。氏は『宋書』の記載を利用して後世の文献などにやはり彌と書されているのを紹介していら

るが、その例として挙げられる『文献通考』なども実は『梁書』の記載に惑わされて宋書の文字を改めたのだと見たい。

なお一言注意したいのは祖彌の意味であるが、これは前に触れたように、前田氏の説明が正しい。しかし私はこれを単に亡くなった祖父・父を意味するのではなく、ここでは「祖先」の意味に使用しているのだと思う。敲密に言えば、この語にはそのような意味はないのであるが、右の表文の最初に「昔より」とあるのを見ると、祖彌という言葉には「祖先より代代」という意味がこめられているように思われる。祖彌と読めばこの「昔より」の語は一層落着の悪い言葉となってしまうのである。

前田氏は祖彌を正しい形と見たために、彌を武の祖父仁徳に当て、その名オオササキ(大鷓鴣)と弥との関係づけに困っていられるが、この比定はもはや必要のないものとなった。彌という倭王は実在せず、済の前代は珍であり、珍が反正であるからには済と珍は当然兄弟となるのである。

### 三

(五) 珍の前代の倭王は讚であるが、『宋書』によれば、珍は讚の弟になっている。松下氏はこのことから讚を廢中に当て、その名イザホワケ(去來穗別)の訓が略されて讚で写されたものと

する<sup>⑬</sup>。那珂氏はこれを仁徳に当てるが、その理由は持統の名がウノササラノヒメミコ(鶺鴒野讚良皇女)であり、讚にササの訓があり、仁徳のオオササキのササが讚と写されたのだというのである。この比定は多くの学者の賛同を得ているが、最近藤間氏は再び讚に殷中説を復活された。氏は『宋書』の記事が『南齊書』・『梁書』に比して信頼に備することを述べた後にいう。

『宋書』にあらわれた倭王は冊封の手続きという視点をはっきりさせての記事であるだけに、系譜的に倭王となった代々の人である。那珂のように殷中の治世は短いから、中国の書物の方でおとしたのであろうといったことは(後出引用文参照——引用者注)、しっかりした証拠がない以上いえない。したがって殷中を消して仁徳をもつてくることを『宋書』の記事は許さない。たとえ短い治世であっても、その人間が公的に使者を出して冊封を願い、そして許された人間ならそのことをはっきりと書くのが『宋書』の常である。

そして氏は更に、

『宋書』に出ている倭の五人の王は五世紀に系譜的に倭王となつた人でこの間にぬけた倭王はいない。

という。氏が『宋書』の記載を正確なものとして取扱った態度は正しいと思う。しかし冊封の手続が当時倭王から完全に行なわれ

ていた証拠は何もない。在位の短い大王が遣使することがなかったということはあり得ることであろう。『宋書』が正確に記録していることと倭王が正確に朝貢していることは別個の問題である。かつその『宋書』に履中に当るべき王名は何もないのである。尤も前述のごとく、イザホワケのザを讚に当てて解する松下氏の説がないわけではない。しかしザに讚が当て用いられている例は未だ他にはない。倭王讚は履中より仁徳がより可能性が多いことは後に触れよう。

それより問題は、仁徳と反正は親子であり、中に履中を差挿んでおり、讚と珍とが兄弟とされることに全く一致しないことである。那珂氏は、

履中天皇ハ在位モ短カケレバ、宋書ニハ、此一代ヲ貶シ、其ノ御弟ナル反正天皇即珍ヲ以テ、直ニ讚ニ接シ、且誤リテ讚ノ弟トナセルナリ。

というが、在位が短いから一代を脱したというのであれば、反正も在位は短かったのであるからそれだけでは理由にならない。珍が誤って讚の弟とされたというのも、何故誤られたかの説明が必ずで、それは何等ここには出ていない。橋本氏はこれに関して次のごとくいう。<sup>⑩</sup>

宋書倭国伝に珍（反正）をば讚の弟と記している事實は、全

く宋書の誤謬として排棄しなければならぬのであるが、之れは恐らく履中天皇の御世に遣使のことがなかった為めに、つぎの反正天皇の時に前天皇の御弟として伝えられた事實が、宋の方では前に使を派した讚の弟として記録せらるるに至つた結果であろうと推せられる。

この考えは大体において誤っていないと思うが、私は実情は次のごときものではなかつたかと考へる。

一体日本の外交官は歴代語学が下手だったようであるが、反正の時代の使者も亦中国語に熟達していたとはどうしても受けとれない。従つてその交渉には通訳が用いられたはずであるが、その任に当たつたのは朝鮮人（多分百濟人）であつたろう。しかし朝鮮人通訳で日中兩國語に通じたものがいたかどうか、それも亦甚だ考へにくい。そこで多分日鮮、鮮中の通訳を通じ、いわゆる重訳によつて相互の意志を通じさせたものではなかつたか。尤もこれは最悪の場合を予想してのことであるから、或はもつと簡略に意志の疏通は計れたかも知れない。しかしそれにしても非常に繁雜でわずらわしいものであつたことは想像されるのである。この状態を前提として、中國の官吏と日本の使者との間には恐らく次のような問答が交わされた。

「現在の倭王は前代のそれとどのような関係になるのか。」

当然の質問ではあるが、これに対して使者は反正の前代は履中であることを思い、

「前代の弟であります。」

と答えた。これも事実としては誤っていない。ところが宋朝には履中からの遣使がなかったために、彼についての記録も記憶もない。あるのは讚についてだけである。従って現在の倭王は前代の讚の弟であると誤解し、そのまま記録に残してしまったのである。私のこのような考えは、もとより適確な史料があつて主張するものではない。しかし当時の状勢や日本の使者の能力を考えると大にあり得ることではなからうか。とすると讚はやはり珍の父で、仁徳に間違いないとしなければならぬのである。

以上によって倭の五王の比定を終つたが、その結果は従来の説とほとんど変りないものとなつた。しかしその解釈には、漢文獻の吟味によって相当異つた説明を行なうことができた。それによつて少くともより一層適確な比定をなし得たのではないかと思ふ。勿論五王については年代の確定化の問題もあるが、五王の比定そのものが従来と大して変らなければ、その問題もここに一一取上げる必要はないであらう。五王の確立化が成功すれば、それに従つて年代も自ら整理されて従来の説が安定化へと向うことが予想されるからである。

#### 四

さて雄略より遡つて仁徳までの諸天皇は、以上に述べたごとく、漢文獻によつて適確にその実在を確めることができた。しかし仁徳の前の応神及びそれ以前となると漢文獻にはほとんど手がかりはない。特に応神の母神功皇后については全く神秘に包まれ、その実在は甚だ疑問視されている。現在のところ諸先学による研究の結果は、応神の実在を認め、神功を後世に作られた架空の人物と見ているようである。つまり応神と神功との間には、歴史と伝承の世界の線が敷かれるとするのである。しかし実際に記紀で説かれるところでは応神と神功は朝鮮征伐を共にし、その後の朝鮮統治にも連関するものがあつて、この二人を全く切離すことは甚だ困難である。その意味では応神も未だに伝承性をかなり残している人物とせねばならぬであらう。

しかしとにかく応神を実在とした場合には、それを歴史的にどのような人物であつたかを説明しなければならぬ。それについての諸説は後に触れるが、結論としては、多少の神秘性は伴うが、応神はその前の王朝を倒した征服者であり、或は初めて日本で王朝を開いたものとして或る王朝の開祖とされるのである。私も応神の実在をことさら疑うものではない。井上氏のいうように、ホ

ンダワケという、それ以前の天皇に比して頗る原初的な名からしてもそれを認めることはできるであろう。<sup>④</sup> 記紀は確に王朝の開祖にふさわしいような華かな事蹟を彼について述べている。しかし伝えられる事蹟については問題が多い。今、より詳細に述べている応神紀を取出して、ごく概括的ではあるが、その内容を検討してみよう。

応神紀を見て、我々が最初に気づくのは対外関係記事がその半ば以上を占めていることである。これらの記事の詳細な吟味は既に池内・三品の両氏によって行われているから、<sup>⑤</sup> ここでそれを再説する必要はない。概観するとその内容は、朝鮮からの貢献、朝鮮への遣使、百済王の交代などに分たれるが、最後の百済王の交代は百濟記など外国の文献を用いており、本来応神紀の内容をなしていたとは思われない。また十五年秋八月の百濟人阿直岐の朝貢、十六年二月の王仁の来朝は阿直（岐）史の氏族伝承と見られるであろう。<sup>⑥</sup> 九年四月の条には、武内宿禰とその弟甘美内宿禰の争う話があるが、これは武内宿禰伝承で葛城系の説話と考えられる。十四年には弓月君が来朝しているが、これには葛城襲津彦がからんでおり、十六年八月の平群木菟宿禰、的戸田宿禰の加羅遠征も襲津彦を連れ帰っているから、本来葛城族の伝承としか思われない。二十年秋九月の条には、倭漢直の祖阿知使主及びその子

の都加使主の来朝があるが、これもその子孫の倭漢直の持っていた祖先伝承であろう。三十七年二月には、阿知使主父子が呉に遣されて縫工女を求める話があり、四十一年二月には、彼等がそれ連れて帰国したが、天皇の生前には間に合わなかったという。これも高麗の国によって呉に渡るといふ点、また天皇の死に間に合わなかったという点に伝説めいたものがあり、三品氏は後にその子孫によって作られた伝承と見ているが、<sup>⑦</sup> 従いたい。

内国関係の記事についても氏族伝承と思われるものは多い。十年十月に吉野宮に行幸して国標人の襲応を受けたというが、これは国標人の伝承であろう。二十二年三月に兄媛を吉備国に帰国させているが、その兄弟子孫たちの封境安堵を述べているから、これも吉備臣の氏族伝承と認められる。五年十月には伊豆国に枯野という舟を作らせたことが見えるが、三十一年八月に枯野が老朽化したので、代りの舟を諸国に作らせ、武庫の水門に集めておいたところが、近くに停泊していた新羅の舟が失火し、延焼して皆失われたので、新羅を責め、新羅王は驚いて優秀な船大工を奉ったという。しかしこれが猪名部氏の祖であるというから、この話も猪名部氏のもっていた氏族伝承であろう。

以上のような外国文献・氏族伝承の以外のものが応神に関するプロパーの伝承と考えられるのであるが、それは次のごときもの



である。

三年冬十月に、東の蝦夷に厩坂の道を作らせた。

六年二月に、近江国に行き、菟道野で歌よみをした。

七年九月に、武内宿禰に命じて韓人池を作らせた。

十一年十月に劔池以下三つの池を作らせた。

この年、日向国より髪長媛を召し、大鷦鷯尊(仁徳)に賜わった。

四十年正月に、大山守尊・大鷦鷯尊を召して問答し、菟道雅郎子を皇太子とした。

この他にも一、二簡単な記事があるが、大した意味を持たないのでそれは省く。結局、応神について語られる本来の伝承は、右の数か条に過ぎないのである。しかもその内容は何ら王朝の始祖としての優れた人間の素質なり、才能なりを示すものではなく、極めてありふれた凡庸の古代君主のそれである。このことは一見応神を王朝の開祖などという考えを全く打壊す材料のごとくも思われる。しかし私は、実は開祖などというものは本来政權奪取までの正確な事蹟は必ずしも十分に伝わるものでないことをここに強調したい。

王朝の開祖となるような人物は、内外ともによく活動するのが東西の例である。しかしその実情はなかなか正確には伝わらない

のである。早い話が応神の真の父母は誰であったのか。それに關しては何一つ手がかりはないといつてよい。今日においては、何よりも仲哀と神功を応神の真の父母と信ずるものはいまい。更にその都した所が何処であったかも明かでない。記によればホンダワケは輕島の明宮に坐したことが書かれているが、紀には何ら記すところがない。ただ二十二年春三月戊子の条に、難波の大隅宮に幸したことが見え、四十一年春二月戊申の日に明宮で崩じたことが書かれ、「一曰」として「大隅宮に崩りましぬ。」とあるだけである。開創期でもあり、諸事整わぬために、王朝それ自体に記録し或は伝承する準備が欠けているのである。応神紀十五年秋七月、同十六年春二月の条によれば、阿直岐が菟道雅郎子に字を教え、後には王仁が来て『論語』と『千字文』を奉獻したという。しかしこの当時『千字文』が出来していたかどうかは既に疑われているのである。先ずこの話は前にも触れたごとく後世に作られた阿直史の氏族伝承と考えなければならぬ。とすると応神朝に文字による記録が行われたなどは到底思われぬ。従つて応神に關して華かな伝承がないのは不思議でなく、そのことは何ら彼の英雄的素質のないのを証明することにはならないのである。歴史の初に現れる開祖は多くは正確な事蹟を持たず、反つて後に他の系統の伝承によつてその英雄性を盛り上げられる場合が多い。

応神もそのようにして後世の材料を添加されてその偉大さを繕われた好個の例といってよい。そして最後に、中国古典の句によって「幼而聰達、玄監深遠、動容進止、聖表有異焉。」<sup>②</sup>という稀に見る名君に仕立てあげられたのである。

## 五

現在の応神像が、右に述べたごとく、後世の人人によって作られたものであるにも拘らず、真実、王朝の始祖であり、多分それにふさわしい人物であったとすると、一体彼は如何なる系統の人間なのであろうか。その両親が不明であること、その出生が神秘的な説話に彩られているとすると、もはやこれを大和王朝（いわゆる三輪王朝または崇神王朝）と関係づけることはできないであろう。事実直接関係あるものであれば、何もそのように神秘的な説話で、その出生や両親を説明したりする必要は毫もないからである。

応神の出自については従来三説が行われてきた。第一は騎馬民族説であり、崇神に率いられた北方の騎馬民族が朝鮮から渡来し、九州からは応神によって指揮されて摂津に上陸し、大和王朝を征服したというのである（江上説）<sup>③</sup>。第二は応神はもと九州にあった熊襲の出身であり、瀬戸内を伝って摂津に上陸し、大和朝廷を滅して新しい王朝を開いたものとする（水野説）<sup>④</sup>。この意味でこ

れは前者と同じく征服王朝説である。第三は、応神は本来河内にいた豪族で、漸次発展して、従来大和の三輪山麓にあった三輪王朝を倒し、河内王朝を開いたものとする（上田説）<sup>⑤</sup>。山根・直木両氏の難波王朝論も大体においてこの説に近い。ともに土着豪族説とでもいうべきものであろう。

第一の説に対する批判は既に考古学者・日本史家の間に行われている。征服ということは民族にとって重大事件であり、その記録はともかく記憶は必ず残るはずである。事実それは言語の上などにもかなりの影響を及ぼすはずなのに、古記録にはその痕跡はない。考古学的にも遺物の上でそれを積極的に証明する材料はないのであるから、この説はやはり承認することはできない。これに比すれば第二の熊襲東征説は頗る魅力のある説であるが、文化程度の低い異民族が摂津・河内に上陸して先進民族を直に服従せしめるのは極めて困難である。それには長い年月がかかるが、それも史上何らの片鱗をも見出すことはできない。またこの説でなければ応神出現の問題を解くことができないというものでもない。結局、第三の説が最もあり得る穩当な説ということになるであろう。ただ第三の説でも、応神が摂津・河内の土豪出身であろうということはいえても、何故それが大王になり得たかという問題は未だ必ずしも充分に解かれてはいない。この問題解決のために次

に詳しく考察を進めてみよう。

第一に考えておかなければならないのは歴史的な背景である。

応神の時代は仁徳(倭王讚)の在位年代から考えて、四世紀後半から五世紀初頭に一応設定されている。従って四世紀後半における日本と朝鮮との交渉が如何なるものであったかが先ず知られなければならぬ。その好個の材料になるのが神功・応神紀の朝鮮関係記事である。

既によく知られたことであるが、神功紀の前半はオキナガタラシ姫の朝鮮征伐に関する説話であり、後半は朝鮮の記録などを基にしたらしい日鮮交渉の記事である。この後半の記事と応神紀の朝鮮関係記事の史料としての検討は池内・三品・井上三氏らによって精密に行われており、それらに付加すべきものを私は持合せない。ただ行文の都合上三氏の研究結果をまとめて設定できる史実を次に掲出しよう。

一、三六六年、日本の使者、卓淳国の仲介によって百済を訪問。

二、三六七年、百済の使者久氐ら、新羅の使者とともに日本へ来朝。

三、三六九年、荒田別ら久氐とともに渡海、百済と結んで新羅を討ち、比自焯以下の七國平定。比利以下四村を降し、

南の祝弥多礼を破る。百済は祝弥多礼の領有を認められ、新羅を挫いて勢力倍加す。以上の地は皆全羅南北道に存在する。

四、三七〇年、久氐、日本へ来朝。

五、三七一年、百済の肖古王、精兵三万を率いて高句麗に迫る。同年、久氐また来朝。

六、三七二年、久氐来朝、七支刀一口・七子鏡一面を奉獻。

七、三八二年、新羅、日本に反抗。沙至比跪(葛城製津彦)

討伐に赴き、反って新羅に味方し加羅を討つ。加羅、百済とともに日本に援を求め、天皇、木羅斤資を遣して加羅を救う。

八、三八五年、百済の辰斯王立ち、日本に反抗。紀角宿禰行

ってこれを責め、王は殺され、三九二年、阿花王立つ。この八年間のことは広開土王(三九一—四一二年在位)の碑によると、「三九一年に倭は渡海、百残加羅?・新羅を破り、これを臣とした。」とあるのに一致する。

九、三九七年、阿花王、高句麗に付き、日本に反抗。日本は百済の領地祝弥多礼を占領、百済は王子直支を日本に送って和を請う。

一〇、四〇〇年、日本軍は百済とともに新羅に侵入、新羅・

高句麗の国境に満ち、新羅は高句麗に援を請う。高句麗軍、新羅に入り、日本軍を追払う。

一一、四〇四年、日本、百済と同盟、高句麗に奪われた帯方の故地を侵し、高句麗は日本に殲滅的打撃を与えた。

右の記事の中には、七の葛城襲津彦の寝返りのような一見伝説風の話もあるが、全部が百済記・広開土王碑によって決定されたものであるからにはもはやこれは伝説ではなく、歴史事実と見なすべきものである。この史実と前半のオキナガタラシ姫の伝説とを併せ考えて、津田氏は姫の伝説は、「伝説口碑から出たものではなく、よほど後になって、おそらくは新羅征討の事実の真の事情が忘れられたころに机上で述作されたものである。」とした。井上氏はこれを批判して大要次のごとくいう。

もとより四世紀後半の新羅征討の主人公が神功であったか、応神であったかは改めて検討してみる必要があるが、記紀の古伝承が、新羅征討の物語をこの前後のこととして述べているということは、朝鮮出兵の事実が決して忘れられていなくなったことを物語っているであろう。オキナガタラシ姫の物語は津田氏のいうように六世紀またはそれ以後にできたものである。しかし物語は観念の所産としてできたものでなく、朝鮮出兵の史実が何らかの径路で記憶された結果であろう。全

体の調子が説話的であること、進路の記載がきわめてぼやけていることは記憶の事実がなかった証拠でなく、記憶の仕方が曖昧であっただけのことである。

而して、征討の主人公が神功か応神かの問題について、「応神は神功とともにのみ(しかも胎児として)朝鮮経営に参加した。」とし、記紀の所伝では実在の天皇に胎中天皇というような奇妙な形像を与え、しかも胎児として以外は朝鮮経営からシャットアウトしてしまった。そしてその代りに、名の上からいって実在の人物らしくないオキナガタラシ姫を主人公にしている。

この矛盾を解き得る唯一の道は朝鮮経営の主人公は実は応神であった。しかしその事実が伝承として伝えられている中に応神の名が消えていった。他方に何か強く記憶に残っている女王があって、それが主人公に変わっていった。そしておしつけられた応神は胎中天皇としてのみ、わずかに伝承にその名をとどめた。こう考える時にのみ合理的に理解されよう。

といい、その応神を押しつけた強力な女性の印象を卑弥呼のそれであるとしたのである。

私は右の井上氏の説で、記憶の事実がなかったのでなく、記憶の仕方が曖昧であったとする基本的態度に賛成する。そして応神が実際に朝鮮征討に加わっていたことも、その主人公であったか

どうかはわからぬという条件つきで賛成する。しかし応神を押し  
のけた強力な女性の印象が卑弥呼から与えられたとするのには賛  
成できない。

成程卑弥呼は紀では神功に比定されている。しかし卑弥呼の存  
在は魏志倭人伝によって日本に伝えられたものであり、魏志を読  
むもののみが知ったことである。もし記紀編纂以前に早くから彼  
女の名が知られていたならば、それは日本化した形であれ、それ  
までの日本の伝承の中に存在したか或は影響を残したかするはず  
である。それが全くなって、紀に突然現れるのは、史官のみの外  
国文献による知識であったことを証明しているのではないか。当  
時一般に卑弥呼に関する知識が普及し、それが神功であると考え  
られていたから、史官がそれを採ったという風にはどうしても考  
えがたいのである。

## 六

このようにもともとの神功の像に本来卑弥呼の投影もないとす  
ると、一体オキナガタラン姫とは何者なのであろうか。これにつ  
いて岡田氏は最近、頗る示唆に富む説を提出された。即ち姫は住  
吉神を奉ずる従軍巫女であり、彼女の活躍によって神の加護を受  
け、遠征軍は勝利に導かれたというような住吉靈験譚が最初にあ

ったとするのである。そして胎中であって従軍する皇子のことは  
母子神漂着神話と結合した際の改変であり、原説話には御子誕生  
はなかったであろう、七世紀に神功の物語が作られる際に古くか  
ら伝えられた従軍巫女の伝説と漂着母子神の神話とを結合して新  
しい物語が作られたのだとするのである。②氏の説は或る論文の註  
で簡単に述べられただけであるのでこれ以上詳しいことは知り得  
ない。しかし実は私もこれと似たような考えを持つに至ったので、  
細部では多少異なる点があると思うが、それを次に述べてみたい。

先に触れたごとく四世紀の後半に、日本が朝鮮と交渉を持ち、  
時として大軍を出し相当奥地まで進んで激しい戦争が行われたこ  
とは事実として間違いない。この軍隊派遣の命令者は当然大和朝  
廷の君主であり、多分摂津の諸港を中心に遠征軍が編成されたの  
であろう。そしてその際、軍の主力をなしたのは当然のことなが  
ら摂津・河内・紀伊の諸地方の人人で、殊に海軍力としてはその  
沿岸の海人たちが動員されたであろう。而してこれらの軍の指揮  
官として、この地方の豪族が出動したことも疑なく、その最高指  
揮官の一人にホンダワケがいたと思われるのである。

またこの遠征軍には巫女が一人参加していた。巫女が戦争に参  
加するのは奇異に思われるかも知れないが、どうやら古代日本で  
はこのようなことはしばしばあったらしい。例をあげると先ず第

一に、景行紀四年九月の条に記される神夏磯媛である。景行天皇が周芳（周防）国の娑婆に幸したときに、一国の魁帥である神夏磯媛が「磯津山の賢木を抜いて、上枝には八握劍を掛け、中枝には八咫鏡を掛け、下枝には八尺瓊を掛け、亦素幡を船の舳に樹てて」来て降服を願ったという。神託によって一國を支配する巫女が、クニの命運を双肩に荷い、舟に乗り軍の先頭に立って服従の意を表してきた有様が彷彿するではないか。第二の例は景行紀四十年末の条に、日本武尊が相摸から上総に渡らんとしたとき、海が荒れ、穂積氏忍山宿禰の女で「王に従いまつる姿」弟橘媛が入水して海神をなだめ、その御蔭で尊は無事に目的地に達したという。記には弟橘媛を尊の后と記し、紀にも次姫つぎのあなと記しているところであるが、これは後世的な修飾で、もともと巫女の役割を荷っていた話であったと考えられる。第三の例は琉球の君南風きんなんふうの話である。既に従軍巫女の例として山根氏が説かれているので、詳しくは述べる必要はないが、一五〇〇年、尚真王のとき八重山遠征が行われ、戦士たちとともに久米島の六名の女神官即ちノロの上位にいる君南風が従軍し、この巫女たちの唱える「おもしろ」と「おたかべ」（祝詞）に励まされて遠征は成功したかのごとく信じられたという。このような形態の征戦が十六世紀の初頭まで事実として残っていたのは驚くべきことであるが、琉球が古代日本の

姿と共通のものを残しているという一般的な通念からすれば、古代日本にも戦の先頭に立つ従軍巫女が実在したことはもはや疑いえないと思う。

右の前の二つの例はともに説話であり、そのまま事実であったとする必要はないが、第三の例と併せ見ると、このような説話の伝えられた背景には、戦争に出動し、一軍の危機にその動向を左右する働きをした巫女が確に存在したのである。朝鮮征討の軍は幾度か出ているが、その何れかの作戦のときにこのような巫女が同行し、その神託によって渡海が進められ、大きな成功を収めたことがあったに相違ない。而してその場合この巫女に神託を授ける主たる神は当然のことながら水軍を構成する海人たちの信仰する表筒男・中筒男・底筒男の三神であった。この神は海神であったから単に撰津方面のみならず、瀬戸内から九州沿岸まで知られた神であったのであろう。しかし撰津ではこの神は住吉大神として定着し、従軍巫女の伝承は住吉大神の靈験譚として形を整えてくる。即ち住吉大神の庇護により、その神託を受けた神秘的な女性の指導に基いて自分たちの朝鮮従軍が成功したと考へば、細かな事実は脱落した形ではあったが、これらの海人の間に長く伝えられるようになったのであろう。

同時に撰津・河内の人人には次のような歴史的課題があった。

多分数度の朝鮮征討はかなりの人間を半島からこの地に移動させた。戦争によって朝鮮から多くの人間を日本に入れたことは神功・応神紀にもしばしば現れ、朝鮮征伐は一面において人間掠奪の戦争ではなかったかとさえ疑わしむるほどである。朝鮮諸王相互の贈与、或はその中国王朝への朝貢にも生口が奉獻されている例からすると、<sup>⑤</sup>当時の支配者から見れば人民は貴重な生産財として考えられていたのであろう。成功を収めた朝鮮征討に撰津・河内の軍が主力として働いたとすれば、この人人への生口の分与は当然大きなものであったはずである。そしてその生口を投入し、新しい水利技術を利用することによって撰津・河内の平野は飛躍的に発展した。応神・仁徳紀には明かにこれらの人人の投入によって開発された灌漑用池の記録が多多残されているのである。<sup>⑥</sup>

また朝鮮征討は次のような影響を及ぼしたのであろう。如何に一六〇〇年前の軍隊とはいえ、相当数の軍兵は統制された一つの強固な組織をもっていたであろう。それは帰還後も社会の階層化にかなりの影響を与えたと思われる。それに加えて捕虜として連れ帰った朝鮮人が、新に最下層に生産財として投入されたのである。

直接生産に携わる奴婢階級はこれによって強化され、一層強大なピラミッド型の階層を構成したのであろう。岡田氏は、大和には大きな政治集団である君姓の豪族がいたとし、<sup>⑦</sup>上田氏は近畿の地方には臣姓を以て皇室とつながる豪族がおり、大阪平野には品部を統率して王権に直属する連姓の伴造系豪族が存在したという。王室に隷属性の強い伴造集団はこのような戦争による組織化がその背景となって成立したのではなからうか。そしてその階層的に組織化された集団の力が、それまでの豪族連合的な大和政権を圧倒するものとなって働いたのではなからうか。とすれば、後に撰津・河内の人人が、開発され発展しつつある大阪平野を見るとき、彼等はそれを指導した王朝の祖先を思い、偉大な祖先として乃至は指導者として応神を回顧せざるを得なかったであろう。即ち応神を強大な王朝の開祖として位置づけ、その事蹟をそれらしく整えることが彼等の歴史的課題となったのである。

ところで応神を偉大な始祖として定着させるのに最初に障害となったのは、その両親についての伝承がなかったことであろう。人人が気がついたときにはその両親についての知識は、彼の伝承から全く欠落していたのである。しかし或はこれは後の人人にとっては幸であったかも知れない。同じ朝鮮征討に活躍した人物としてオキナガタラシ姫があり、それが恰好の母親とすることがで

きたからである。『住吉大社神代記』には、姫が住吉大神とみよまひと密事ひそかにをすることによって応神が生れたとする説話を伝えているが、これが伝承の最初の形であったのであろう。

朝鮮征討についての事蹟も応神に關しては既に曖昧なものになりつつあった。恐らくただ参加したということだけが伝わっているに過ぎまい。しかしオキナガタラン姫に關しては住吉大社または海人の間に、やはり物語化した形ではあったが、一つの伝承が残っていた。否この伝承の故に姫の名が残っていたのかも知れない。この姫の伝承が完結した形で存在したとことと応神についての伝承の曖昧さのために、応神は姫側の伝承に真実らしい形で入りこめず、胎中参加という奇妙な形をとって、整理されたのである。住吉大神の子として、オキナガタラン姫の腹を借りて生を受け、胎中にて征討に参加したという形で二人は連結され、これがその一連の物語の原型となったと考えられるのである。

一度この原型が設定されると、それは海人たちの口伝えによって広く瀬戸内から北九州まで拡がった。そして各地に姫と応神に關する伝承が作られて行く。各地の海人が、その先祖がこの遠征に参加したのとして説話を作り、地名の説明にもこの遠征譚が用いられた。それらが更に中央に集められ、姫の像を一層豊かにし、現実らしく見えるものに作られていったのである。それらの

地方の、断片的な遠征関係の説話は、少しく後に編纂されたものではあるが、今日『風土記』以下の諸記録に見ることができるのである。

オキナガタラン姫伝説はその後更に色色な修正を受けたようである。直木氏は姫の性格を後世の女帝などの事蹟によって説明し、反映法による優れた考察を行なっている。<sup>⑧</sup> 私は氏の考察を充分に納得するものであるが、ウェールを次次と剥いていって最後に残るケルンは何かという点に不十分なものを感じていた。氏は、神功皇后は新羅征討のことを実際に断行した七世紀以降の女帝をモデルとして、その時代の宮廷の人々が構想した人物であって、四世紀末に実在した人物ではない。

とされるが、推古以下の女帝はモデルそのものではなく、性格づけに使われただけのものであろう。換言すれば推古以下の女帝に關する事実が神功の性格づけに役立っているのであって、これも反映の材料であったに過ぎないのではないか。従って反映法は性格づけの過程を説明することはできても、最初の現実が何であったかについての十分な説明はできないと思う。神功の伝承がその後如何にして定着していったかというプロセスの問題は既に井上氏によって要を得た叙述がなされているので、それに譲りたい。<sup>⑩</sup>



八

なお最後に一、二付加えておきたいことがある。その第一は武内宿禰伝承についてである。武内宿禰が数代の天皇にわたって仕え、特に神功の事蹟において相当な役割を演じていることは既に知られている。従来この人物については津田氏以来、推古女帝―皇太子聖徳太子―蘇我馬子大臣の関係を考え、その反映として蘇我氏中心に造作された偉大な宰相という解釈が多かった。しかし岸氏は宿禰に関する伝承を精密に検討し、記のそれは何ら歴史的に必要な働きをする人物になっていないとし、従って最初から神功の伝承に加わっていたかどうか疑わしく、紀においては記と同様それはせいぜい大王に近侍した忠臣という影像に止まることを説かれた。而して七世紀後半の齊明女帝―皇太子中大兄皇子―中臣鎌足の関係において彼を見ることがまた可能であることを示唆したのである。私は氏の指摘するところを妥当な見解として従うものであるが、なお宿禰に関する伝承は、応神王朝における葛城系の諸氏の位置よりして、この系統の間に、朝鮮工作に關与した古い祖先の一人としてその名が伝わっていたものと考えたい。その故にそれは同じ葛城系の後出氏族たる蘇我氏によって取上げられ、古い輔弼の臣の家柄であることを強調するために、神功・

応神の伝承に添加されたのであろう。もしこれが単に蘇我氏のみによって作られた伝承であるならば、蘇我氏の滅亡とともに却けられたはずであり、それがこのことなく反って七世紀後半に一層肉付けされたのは、輔弼の臣に対する新たな認識もさることながら、葛城系の古い伝承としてなおこの祖先が消しがたい存在になっていたからであらう。

第二に注意したいことは、応神の出身が河内の一豪族に過ぎないことと、何によって彼は大王になり得たのであろうかということである。勿論以上の叙述によれば、朝鮮征討の成果によってその富力を養い、大和朝廷を實力を以て圧倒したからだとも考えられる。しかし朝鮮征討を命ずる程の君主が既に大和にいたし、少し廻れば卑弥呼のような中心勢力が大和には存在していた。とすれば、如何に力のあった応神でも容易にこれから大王の位を篡うことはできなかったはずである。一体如何なる経過によって応神は大王になり得たのであろうか。このことを解くのは至難のわざである。勿論記紀には仲哀天皇の子の香坂・押熊の二皇子がおり、それを神功が丸廻臣の祖難波根子建振熊に討伐させたことになって<sup>④</sup>いる。しかしこれは伝承であって史実とは考えられない。ただ一つ注意を引くのは、応神が景行の曾孫のナカツ姫(仲津姫)と婚していることである。これについて井上氏は姫の祖父に当た

るイホキイリヒコ（五百木入彦、景行の子）の系譜を、ヤマトタケル（日本武尊）・仲哀の名が書き入れられる以前の古い帝紀に存在したものとし、応神はもとの系譜では皇統の入りむこであったとされた。<sup>⑤</sup>しかし氏はこの系図を歴史的真實であるといっているのではなく、「古い由来をもつ系図であろう。」と慎重に述べているのである。<sup>⑥</sup>私も勿論イホキイリヒコからナカツ姫までの系図がそのまま真實であるかどうかは断言できない。ナカツ姫という名すら固有名詞とは考えられないからである。しかし応神が大和朝廷の女性と婚したことはあり得ることだと思ふ。当時大和で大王であったのが誰かは明かではないが、応神の方からの政策としても大和朝廷と婚姻を結ぶことは必要だったはずである。否むしろそのような婚姻によって初めて王位継承を彼は主張でき、人人を納得させることができたのではないか。蓋し略略結婚は政治的社会的開始とともに人間の持った最も古い智慧であったからである。イホキイリヒコに関する系図が真實かどうかはさておいて、私はやはり応神は大和朝廷の血縁の女性を迎えたことは疑ないと思ふ。

応神はもともと伝承の少ない人物であり、両親の名さえ欠落しているような存在であった。しかし王朝が栄えるにつれ、先ずそ

の両親を作る必要に迫られ、朝鮮征討の連想から任吉大神を奉ずる従軍巫女が母親とされ、大神がその父親とされた。彼はこれによって神の子とされ、王朝の開祖にふさわしい神秘性と神聖性を付与されたのである。恐らくこの伝承は継体即位までの応神王朝の宮廷においてその成型を見たものと思われる。しかし欽明以後の時代において継体王朝が大和に安定するに従い、土地の豪族、例えば三輪氏や丸瀨氏の氏族伝承が取入れられ、応神の前代の王系として崇神王朝が構成されるようになった。そしてこの二つの王朝をつなぐために、ヤマトタケル・仲哀天皇が設定され、応神は仲哀の子、オキナガタラン姫は仲哀の妃神功として定着せしめられた。オキナガタラン姫という名、その系譜或はその性格は推古以後に準備され、天武のときには既に現在の燦然たる英雄的女神の形に整えられていたと思われるのである。

以上、私は応神王朝の各大王の名を従来とは異った方法で確定化し、進んでその祖先たる応神と神功の原型が如何なるものであったかを考察した。応神・神功の伝承に関して、津田氏は継体・欽明朝にほぼ原型が出来上ったと見るが、直木氏は伝承の大綱は主として七世紀以降に成ったとする。しかし王朝の始祖という点からすれば、それは応神王朝の中期以降に原型は成立しており、その後の史的事実の影響を受けて修飾が行われていったと考

えるべきではないかと思う。本稿の叙述については、後半は特に推測が重ねられ、論証の不十分な点が多いことを自覚するが、今はただ私なりの考えをあらまし述べて諸賢の高評に委ねたい。

- ① 松下見林「異称日本伝」巻上一、『史籍集覽』第二十册所収、二二頁。前掲書。
- ② 那珂通世「外交釋史」卷之四、東京、昭和三十三年再版、五四八頁。
- ③ 菅政友「漢籍倭人考」下、『菅政友全集』、東京、明治四十年、三四五頁。
- ④ 原勝郎「日本書紀紀年考」『日本中世史の研究』附録第二、東京、一九一九年、一〇八四頁。
- ⑤ 松下前掲書。
- ⑥ 那珂前掲書。
- ⑦ 松下前掲書。
- ⑧ 那珂前掲書。
- ⑨ 前田直典「応神天皇朝という時代」『オリエンタリカ』第一号、東京、昭和二十三年、七六頁。
- ⑩ 前掲論文。
- ⑪ 前掲論文七九頁。
- ⑫ 松下前掲書。
- ⑬ 那珂前掲書。
- ⑭ 藤間生大『倭の五王』岩波新書、東京、昭和四十三年、三四頁。
- ⑮ 橋本増吉「東洋史上より見たる日本上古史研究」『東洋文庫論叢』第三八、東京、昭和三十一年、五九七頁。
- ⑯ 直木氏は「現実の世は応神からはじまり、それ以前は伝説の世である」という考えが明確ではないにせよ、広く七世紀の氏族の代表者や宮

廷の人々に意識されていた。」とする(直木孝次郎「応神王朝論序説」『日本古代の氏族と天皇』、東京、昭和三十一年、一九五頁)。

- ⑰ 井上光貞『日本国家の起源』岩波新書、東京、昭和三十一年、一一九頁。
- ⑱ 池内宏『日本上代史の一研究』東京、昭和四十五年一一二頁以下。この書は昭和二十二年に初版が出ているが、今都合により再版本を用う。
- ⑲ 三品彰英『日本書紀朝鮮関係記事考証』上巻、東京、昭和三十七年、二一五頁以下。
- ⑳ 応神紀二十八年の条に、菟道稚郎子が高麗の書信の無礼を責める話があるが、これも同系統の説話であろう。高麗が当時我が国に使者を遣すというのがそもそも不自然な話である。
- ㉑ 三品前掲書二五九頁。
- ㉒ 三品前掲書二四〇頁。
- ㉓ この文の出典は『東觀漢紀』孝章皇帝紀卷二、『隋書』藝術伝であるという(『日本書紀』日本古典文学大系、東京、昭和四十二年、三六二頁註七・八・九)。
- ㉔ 江上波夫『騎馬民族国家』中公新書、東京、昭和四十二年、一八四頁。
- ㉕ 水野祐『日本古代王朝史論』、東京、昭和二十九年。
- ㉖ 上田正昭『大和朝廷』角川新書、東京、昭和四十二年、一三二頁以下。また岡田氏も同説である。岡田精司「河内大王家の成立」『日本書紀研究』第三冊、東京、昭和四十三年、参照。
- ㉗ 山根徳太郎『雄波王朝』、東京、昭和四十四年。直木前掲書。
- ㉘ 池内、三品両氏の研究については註⑱参照、井上氏のものには註⑲の『日本国家の起源』一〇〇頁。
- ㉙ 津田左右吉『日本古典の研究』津田左右吉全集、東京、昭和三十八

年、一〇八・一二二頁。

④ 井上前掲書一〇七頁。

⑤ 岡田精司「天皇家始祖神話の研究」『日本書紀研究』第二冊、東京、昭和四十一年、三六六頁註(9)。

⑥ 山根前掲書九八頁。山根氏は伊波普猷氏の論文「古琉球の政治」からこれを採られているが、今伊波氏のものを見るを得ないので、山根氏の記述に従う。

⑦ 朝鮮諸王相互の贈遺の例としては、三九六年に高句麗が百済を屈服させたこととして、広開土王碑に、「百殘困逼、獻出男女生口一千人、細布千匹。」とある(三品前掲書二二三頁)。百済の直支王の東管への四一六年の朝貢では、「王余映遼獻生口。」(『梁書』諸夷伝百濟)であったという(前掲書二四三頁)。余は百済王の姓、映は直支の別の転写腆支の腆字の誤りであろう。

⑧ 三品氏は韓人池の建設に関連して具体例をあげて当時の朝鮮人の農地開発への貢献を述べている(三品前掲書二二〇頁)。

⑨ 岡田精司『河内大王家の成立』五五頁。

⑩ 上田正昭「大和國家の構造」『岩波講座日本歴史』第二卷、昭和三十七年、三〇頁。

⑪ 田中卓『任吉大社神代記』大阪、昭和二十六年、一七頁。

⑫ 直木孝次郎「神功皇后伝説の成立」『日本古代の氏族と天皇』、東京、昭和三十九年、一五三頁以下。

⑬ 前掲書一六二頁。

⑭ 井上前掲書一七七頁。

⑮ 岸俊男「たまきはる内の朝臣」『日本古代政治史研究』、東京、昭和四十一年、一五三・一五四・一六一頁。

⑯ 私は畿内邪馬台國説をとっている。

⑰ 紀では討伐を行なったのは武内宿禰になっているが、この方は後に宿禰伝説によって改変されたもので、記の方が古い形を伝えていると思う。

⑱ 井上前掲書一七四―一六頁。

⑲ 井上前掲書一七六頁。

(京都大学文学部教授)

in *Li-chi* 礼記 added, and its name was called *Kung-chü* 貢拳 and then *K'o-chü* 科拳 from about the *T'ang* era.

## About the Five Kings of Japan 倭の五王

by

Hisashi Sato

The problem to decide the emperors who “were the Five Kings of Japan” should have generally been established by *Kenrin Matsushita* 松下見林 and *Michiyo Naka* 那珂通世; but there are some questions in the method of their deciding.

This article presents another opinion which would make the traditional decision surer. At the same time, we will speculate the assumption that Emperor *Ojin* 応神天皇, their ancestor, had very few legends and was made to be a great existence at least through many additional records, and the legend of Queen *Jingu* 神功皇后, his mother, was more mysteriously framed up with the existence of female mediums at the front in the Conquest of Korea.

## The Construction of *Nagaoka* Palace 長岡宮 Judging from the Seasoning of Timber

by

Kiyoshi Kobayashi

It has been concluded that in the 3rd year of *Enryaku* 延暦 (784 A. D.) Emperor *Kanmu* 桓武天皇 appointed a large group of officials for the construction of *Nagaoka* Palace 長岡宮, and the assassination of *Tanetsugu Fujiwara* 藤原種継, chief constructor, on September of the next year caused the slow advance of the construction. The construction, however, was found surprisingly to make a good progress, owing to the excavation for more than ten years and remains discovered through development.